

タイプニツツと美學

深田康算

五

以上に於て吾々はペーコンの想像力説をば主として吾々の興味を中心たる彼れの詩論に就て検査し來たつたのであるが、其検査からして辿り着くことのできた結論へ吾々はしかし又彼れが他の關係に於て想像力を論じてゐる個所からしても——恐らくは尙一層の近路に依りて——到着することができらうであらう。蓋し想像力はペーコンに従へば一方に於ては、上述の如く、知性 *Understanding* の中に於て記憶力 *Memory* と理性 *Reason* との中間に其地位が配當せられ、歴史 *History* と哲學 *Philosophy* との中間たる詩 *Poesy* に對する能力として規定せられてゐるけれども、其れと同時にそれは又他方に於ては知性と意志との中間に於て役目を有する能力であるともせられてゐる。想像力は即ち吾々の心的能力の一半たる知性の中に於て中間の地位を占めるのみならず、吾々の心的能力の全體の中に於て又中間の地位を占めるのであ

る。吾々の心的能力は知性と意志との二つに分たれ、知性は記憶と理性との二つに分たれる、さうして此各の二つの中間にそれ／＼、第三者として想像力が其地位を配當せられる。『知識の進歩』第二篇第一章及び第十三章に於ては上述の如く記憶と理性との中間能力として想像力が説かれてゐたのであるが、第五篇第一章に於てはそれは知性と意志との中間能力として説かれてゐる。

『知性論と意志論とは双生兒である。何故ならば、理知の清透と意志の自由とは共に生まれ又相共に死に去つたからである。又眞と善との間に存する如き親密なる共鳴は宇宙間他に見出さるべくもない。若しも學識ある人々にして、其知は翼ある天使の如くであり、しかも其情は地を匍ふ蛇の如くであるとしたならば、若しも彼等の心は實に鏡の如くであり、しかも其鏡には汚れたる斑點があるとしたならば、彼等の耻は愈多いであらう。——心的能力の作用及び對象に就ての論は、一般に承認せられてゐる如く、論理學と倫理學との二つに分たれる。論理學の取扱ふ所のものは悟性及び理性であり、倫理學の取扱ふ所のものは意志、欲望及び感情である。前者は判断を生み、後者は實行を生む。ところで、想像力は此兩方面に向つて傳令者若しくは使臣としての役目を執り行ふもの、判断の能力に對しても助けとなると共に又

實行の能力に對しても助けとなつてゐる。一方に於て、感覺は諸觀念を先づ想像力に傳へ、しかる後に理性が其等を判斷する。そのやうに、他方に於て、理性は其判斷し選擇せる諸觀念をば命令の遂行に先つて又先づ想像力に之れを傳へるのである。想像力は常に意思的運動に先行しさうして之れを刺戟する。想像力は、さうであるからして、知性と意志とに對して實に共同の道具なのである。云はばヤヌスの如くに腹背兩方に向つてゐる所の二つの顔面を彼は持つてゐるのである。さうして理論に向けられた其面は眞理を假托する面影であり、行爲に向けられた其面は道德を假托する面影である。此兩面はしかしヤヌスの其れとは異なり姉妹の其れの如く相似たるものである。——想像力はしかし單なる使者たるに止まるものではない。彼には小ならざる權力が委托されてゐる、否寧ろ此の如き權力を彼は敢えて篡奪しようとする。アリストテレスが巧みに云つてゐるやうに『政治論』第一篇第五章、心が體を支配するのは主人が奴隷に對する如くであり、理性が想像力を支配するのは、市長が自由市民に對する如くである。自由市民には自ら市長となりて支配者の地位に立つ時も來りうる。恰もそのやうに、例へば信仰及び宗教に於ては想像力は實に理性を凌駕するに至つてゐる。但しそれは宗教的智慧そのものが想像力に根ざ

してゐるのだと云ふことではない。むしろ宗教的道徳に於て恩寵が意志の作用を利用して如くに、宗教的知識に於ては恩寵が想像力の作用を利用してである。宗教が比喻、模範、寓話、夢想、幻想等を借りて人心に訴へようとするのは畢竟その意味に於てゐる。又例へば辯論に於ても想像力は雄辯の刺戟に依りて非常なる勢力を有してゐる。辯舌に依り鎮撫せしめられ、激昂せしめられ、若しくは孰れかにせよ或一方に傾かしめられるのは、想像力の昂進に基くのであり、想像力はかゝる際奔放となり、或は理性を盲目にし、或は熱狂せしめることに依り、理性を侮辱するのみならず、又理性に對し暴行をさへ加へるに至る。——しかし先きに立てた記憶力に歴史を、想像力に詩を、理性に哲學を配當した分類を捨てるべき理由はない。何故ならば想像力は總じて學術を構成せしめる方ではない。想像力に歸せられる所の詩は學術と見做さるべきではなく、むしろ才の働らき *a play of wit* と見做さるべきだからである。……『知識の進歩』第五篇第一章。尚ベーコンは第四篇第三章に於て所謂自然的魔術に於て説かるゝ魅力 *Fascination* なるものがやはり想像力に基くものであることを指摘し、此の如き勢力を有する所の想像力は十分闡明せらるべき價值を有することを説いてゐる。

之れによつて見れば、一方に於て論理學が知性に倫理學が意志に配せられてゐる上から云へば、歴史と哲學とが論理學に屬すると同様に詩も亦論理學に屬せしめられると共に、他方に於て、想像力が知性と意志とに對する共同の道具とせられてゐる上から云へば、詩は論理學と倫理學との二領域に跨がるものとせられる。詩が特殊の性質及び關係がペーコンに依りても十分に注意されてゐるのだと云ふことは明らかである。さうして又詩が學術でなくして『才の働らき』なることも指摘されてゐるのである。しかしながら、詩はペーコンに依りて、吾々の先きに見た如く、何處までも歴史と哲學との外衣に過ぎぬものとせられ、さうして、今又吾々の見る如く、想像力は何處までも知性と意志との單なる道具とせられてゐる。詩が詩としては畢竟歪める世界像を寫すものに外ならぬこと、及び想像力は想像力としては遂に又誤謬の源泉たるに外ならぬことは、そこからして自ら明らかなと云はなければならぬ。さうであるからして若し假令ペーコンが彼れの典雅なる辯舌と巧妙なる古典の引照との『利用』に依りて詩をさうして想像力を如何に雄辯に賞讃しようとも、世慣れたる紳士の辭禮に對する顧慮以上のものを拂ふべく誘惑されてはならぬで

あらう。彼は詩を以て物を心に従はしめる想像力の所産だと云ふ、しかしながら其詩とは寓意的比喩的散文より以上のものを意味しない。彼は又想像力を以て真理と道德との境界線上に置かれたる双面像だと云ふ、しかしながら彼れの云ふ所の道德とは功利的なる『心の耕作術』(Georgics of the mind) (第七篇第一章以下参照)より以上のものではない。さうして彼れの云ふ所の真理とは『あらゆる學術の大なる母親』たる『自然哲學』(『新らしき論理操典』第一篇第八十節参照)より以外の何物でもあり得ない。宗教が彼れに取りて Deus ex machina であつたやうに、道德がやはり又それであつたやうに、詩も藝術も亦遂に彼れに取りてはそれでなければならなかつたと云へる。あらゆる知識の源泉をば經驗の中にのみ認めようとする彼れの經驗主義の立場に於ては、心は何處までも物に従はしめられなければならない。しかしして物に従ふとは自然の法則と事物そのものゝ實證とに従ふことである。それに従つてのみ始めて攫取せられると考へられた認識に對比せしめられる時、あらゆる他のものは盡く皆誤謬でなければならぬ。物をして心に従はしめる所の想像力が私生兒の親でなければならぬことは明らかである。

要するに、ベークソンの想像力説は歴史的にも又理論的にも極めて興味多きもので

あるが、其最も興味深き所以のものは、彼れの立場からしては想像力が適法的には確
 認せられえないと云ふ點にある。彼れ自身の言葉を借りて云ふならば『物をして
 心に従はしめる』原理を彼は遂に規定することができなかつたのである。しかし
 て今此點だけに就てさへ彼をライブニッツの所説に關係せしめて見る時、吾々は彼
 に於て吾々の空しく求めた所のものがライブニッツに依りて與へられてゐること
 を知る。——その『知性自身』*intellectus ipse*の説に於て、その『小さき表象』*petites percep-*
*tions*の説に於て。

六

何故ならば『物をして心に従はしめる』ことの正當さを確立しうるためには、少く
 とも之れに先つて物に心の従ふと云ふこと、物そのものを吾々が知ると云ふこと、
 —換言すれば物と物の表象とが如何にして合致しうるか——に就ての反省が必要
 である。此反省なくしては、——素朴的獨斷的に物に心が従ふと見做されてゐる間
 は、——物をして心に従はしめることの單なる可能さへもが考へられえない。——
 此反省はカントの所謂コペルニクスの轉向へ導き行かなければ止まぬであらう——

一。物をして心に従はしめる所の想像力に對する權利確認は、むしろ、云はゞあらゆる物をして心の所産たらしめる所の知性若しくは理性若しくは意識の根源性の基礎の上に於てのみ始めて成立しうるのであると云へる。しからざれば藝術的想像力は『永劫漂泊の猶太人』たる運命を知性界に於て擔はなければならぬであらう。そは恰も *Sollen* を其本質とする道德的意志が、自然の法則と事物そのものゝ實證とのみから出發する所の世界觀の中に於ては『他國者』として、云ふ迄もなく『厄介なる』他國者として、取扱はれなければならぬのと同様である。ライプニッツのモナド説 *Monadologie* は其所に含まれてゐる色々の難點にも拘はらず、物に對する心の根源性——カッシーラ *Leibniz' System in seinen wissenschaftlichen Grundlagen*, 1902, s. 458 の語を借りて云へば *Spontanität des Bewusstseins gegenüber den Dingen* を徹底的に説いてゐる點に於て、藝術的想像力及び道德的意志に對し——少くとも原理的に——それぞれ其安定の地位を與へてゐると云へる。自然現象の實在性が自我自らの作用に根ざすこと、道德的人格の概念及び従つて又歴史の現實性なるものも亦此の如き作用から生み出されることの認識された時、換言すればあらゆる實在が自我若しくは主觀に根ざすこと、あらゆる物が心の所産たることの認識された時、其時始めて藝術的形像の世界は、それが恰も最も痛切に最も必然的に其根基を主觀に置いてゐると云ふ丁度其理

由からして、實在の少くとも新らたなる一種たるべきことが理解され又基礎附けられる。其時始めて、例へば詩は——ペーコンの見做したやうに——單に歴史と哲學とに對する、事物の經驗的存在に對する、偶然的附加物たるものではなくして、むしろ獨自なる一種の眞實性と一種の客觀性とを有するもの——正當に第三者たる權利を有するもの——なることの認識が可能となると云へる。

さう云ふ理由からして吾々はライプニッツの所說に見出される二つの點を特に興味あるものとして擧げうると思ふ。一は『知性自身』の說、即ち『知性の中に在るものにして、感性の中にあらざりしものはない、しかし知性の中に在るものにして知性其自身ならざるものはないのである』*Nihil est in intellectu, quod non fuerit in sensu, nisi ipse intellectus.* (Leibniz, *Considérations sur la doctrine d'un esprit universel*, 1702. Erdm., 180 a. Leibniz, *Hauptschriften zur Grundlegung der Philosophie*, Bd. II. 1906, s. 54. 參照。他々『小るる表象』*Petites Perceptions* の說である。主要なる個處 *Nouveaux Essais, Avant-Propos*. 1703. Erdm., 197 a ff. 參照。 *Neue Abhandlungen*, 1915. s. 10 ff. 參照。) 強めて云へば前者に依りて藝術は知性に對して『他國者』たる運命から救ひ上げられる、藝術も亦知性の懷の中に收められる。後者に依りてしかしそれは他のものから區別される、廣き國土の中に於て彼自身の所有に屬する領域が認められるのである。(未完)